

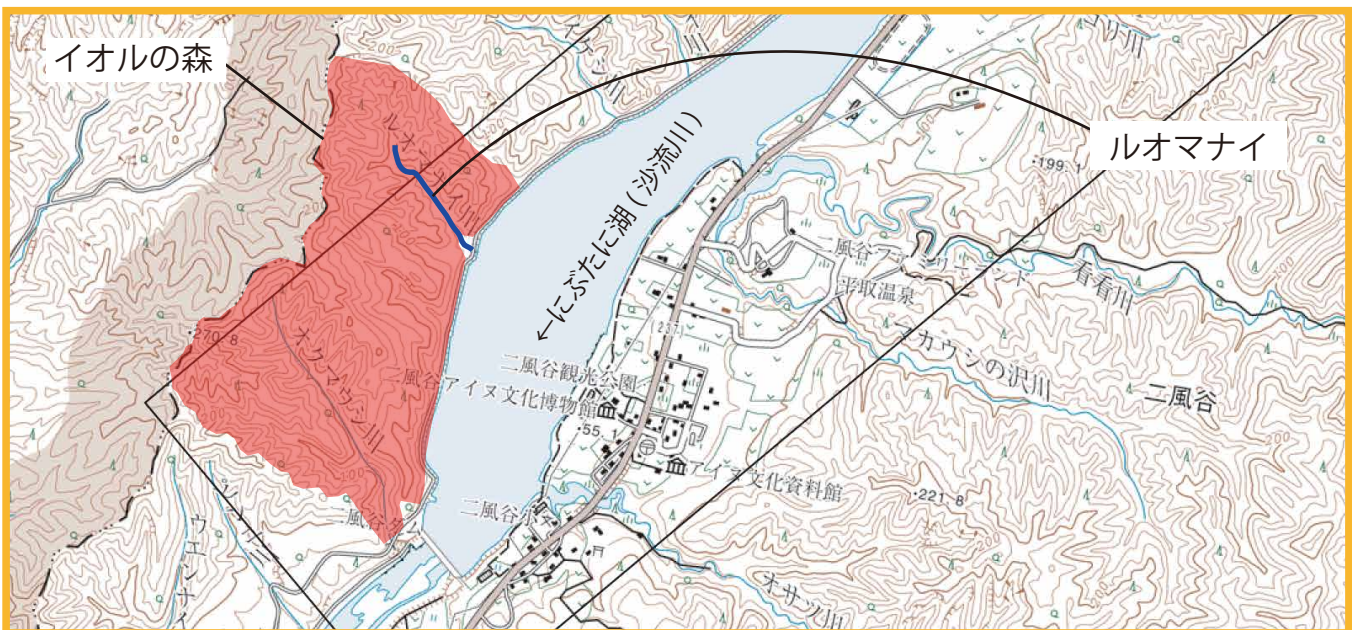
重要文化的景観 —重要な構成要素の紹介6—

二風谷の古道（二風谷区域：アイヌの伝統を伝える山野と集落の景観）

二風谷^{にぶたに}にある「イオルの森」のなかに、ルオマナイ（ru oma nay：道・入る・沢）というアイヌ語地名があります。地域の住民が^{むかわ}鶴川流域へ行くための^{とうげみち}峠道に利用していたとされる沢です。松浦武四郎が安政五年（1858）年に二風谷へ来訪した時の記録にも、同じ沢に“ルマナイ”と記載されています。「其名義は此川^{そのめいぎ}まま路^{このかわ}有り^{みちあ}と云儀^{いうぎ}のよし也^{なり}」と述べられており、明治以前からの古い道であったことが分かります。

近代以降は北海道の社会基盤整備が進む中、徒歩での往来に用いる峠道が徐々に使われなくなっています。その一方で地域の古道を知ることは、住民が^{つちか}培ってきた元々の暮らしと土地利用の意識を読み解くことにもつながります。

山林の場合は峠越えの沢道、川の場合は渡船場で、それらが集落と集落を結ぶ「ル」（道）とつながり生活の利便性を高めていきます。道と集落、山、川の接点や境界面は、沙流川流域の文化的景観の本質的価値を知るための重要な特性といえます。（長田佳宏）



ルオマナイは「イオルの森」内を流れる沢である。このほか沙流川流域には、峠道の沢を表すルペシペ（ru pes pe：道・に沿って下る・もの）や、通行困難な沢の特徴を示すウェンナイ（wen nay：悪い・沢）といったアイヌ語地名がみられる。

ルオマナイの言い伝え

この沢沿いには、西隣の鶴川川の枝沢、イナヤップ沢へ山越えする道がありました。それで、道のある沢と名づけられたものです。

今は船越さん兄弟がルオマナイの沢口で住んでいます。日高海岸に鉄道のない頃は、この沢から鶴川へ出て早来から汽車に乗って札幌に出たのだそうです。有名な日高豚の早来までこの道を歩かせて運びました。（萱野茂 1984『沙流川沿いの地名』より）



『沙流川沿いの地名』はアイヌ語地名と合わせて地域の逸話や植生が紹介されており、平取町の郷土史を学ぶための良書といえる。

ルオマナイ沿いを歩いて春の山菜を採取（2017年5月13日撮影）。イオルの森で一般を対象にした普及事業が度々行われている。